

津軽のリンゴ園に生息、食害のハタネズミ

弘前

弘前大学農学生命科学部の機関研究員であるムラノ千恵さん(44)を中心とする研究グループが、津軽のリンゴ園に生息し食害を引き起こすハタネズミが、雪の積もらない地域の個体群とは異なり、1～2月の厳冬期に繁殖し、春先までに個体数を増やす生態であることが分かったと発表した。ムラノさんは「果樹の食害防止に向け、研究成果を防除手法の確立につなげていければ」と話した。(船越太郎)

厳冬期に繁殖 春先個体数増

弘大農学生命科学部ムラノさんら研究



同僚部の東信行教授、森林総合研究所野生物研究領域の飯島勇人主任研究員



ムラノ千恵さん

防除法確立へ期待

との共同研究で、成果は1日付で国際的な学術誌「Population Ecology」の電子版に掲載された。

ムラノさんは弘前市内のリンゴ農家でつくる「下湯口ふえの会」の協働で、リンゴ畑

におけるフクロウを使ったハタネズミの駆除効果などについて長年研究を続けている。この中で、春先にハタネズミの個体数が増加している傾向を感じ、2017年4月から19年5月にかけて、耳に識別タグを付けたハタネズミ(ムラノさん提供)

けて捕獲調査を行った。調査は同市下湯口のリンゴ畑など6カ所を対象に、1ヶ当たりの生息密度と生存率の推定値を割り出した。エリア内で捕獲したハタネズミに識別タグを付けて畑に放ち、雪が積もる12～3月以外は1カ月置きにタグを付けた個体の動態や新たに見つけた個体(新規加入)へのタグ付けを継続した。

そのデータを解析したところ、推定個体数は毎年4月に101～107匹と年間ピークを迎えていたことが判明。さらに、雪解

後に増えたネズミをフクロウやホンドギツネが捕食することで、春以降の個体数が激減する傾向も明らかになった。

この結果について、ムラノさんは「既存の研究では春から夏にかけてが繁殖期とされてきたため、思わぬ結果だった」と説明。ハタネズミは北海道と四

国以外の日本全国に生息しているとされるが、「非積雪地の個体群とは全く異なる動態」とし、ハタネズミを含む約150種のミスハタネズミ亜科の中では北極圏に生息するノルウェーレミングのみと調査結果の意外性を強調した。

上記の画像は、当該ページに限って”陸奥新報”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。